

彼の名は

第15期生 福田 笙一

それは、吐く息も白くなるような12月某日のことである。

まだ日も昇らない早朝、男女7人の姿は恵比寿のマクドナルドにあった。そのオシャレさ故に様々なドラマ・映画の撮影地にもなっている「住みたい街ランキング」2位のオシャレタウン恵比寿では、マクドナルドでさえもオシャレで、2階建の建物の中にはカフェも併設されていた。メニューもオシャレなものが充実しており、ブラウニーやマカロンがケースの中に綺麗に陳列されている様子は、まるで宝石箱のようであった。しかし、その店内は、オシャレな店舗とは裏腹に、終電を逃した者、帰る家が無い者、彼らと同じく決戦をしている学生などが数人いる程度で閑散としており、その空気も重くどんよりしていた。もうじき迎えようとしているクリスマス仕様のアップテンポなBGMは返ってその重い空気を助長していた。

働き方改革によって夜通し開いている場所が少なくなっている昨今、24時電気が消えず、Wi-Fi やコンセントなど決戦のための設備が充実している恵比寿のマクドナルドは、彼らにとって、決戦の日に駆け込む不夜城であった。

その日も決して負けられない決戦の日で、重要な原稿の締切であった。なんとか作業を終わらせるべくマクドナルドに集まった7人は、前日からマクドナルドにいる者、始発で集まった者と様々であったが、全員前日から続く夜を徹しての作業に疲弊していた。

恵比寿のマクドナルドで決戦をする際は、6時から販売が開始される朝マックで決戦を終えるというのが今までの彼らのルーティーンであったが、決戦の敗北が目に見えていたその日は少しでも時間を節約するため、美味しい朝マックを食べることなく、すっかり冷めきったコーヒーを片手に作業を続けた。6時を過ぎると、今まではガラガラであったマクドナルドも、通勤前にコーヒーを飲みに来るサラリーマンや、朝マックを食べに来る学生などで混雑し、店内はすっかり賑やかになる。混雑するマクドナルドで作業を続けてしばらく経った6時23分、全員の携帯電話がメールの受信を知らせた。

「テキストファイルに使われている全ての「タブ」を「半角スペース」に変更せよ。」

このメールを受けた7人は狼狽を隠せなかった。パソコンを開いている時間こそ長いものの、その大半の時間はWordかPowerPointか論文である彼らにとってテキストファイルの加工は未知の作業であり、全員の頭に「どうやって?」という5文字が浮かんだ。先ず彼らは、おそらく存在するであろう効率的な方法を探すべく彼らは試行錯誤したものの、何度試してもその方法は分からず、遂に「タブ」を1個ずつ「半



不夜城の昼の様子

角スペース」に変更することにした。初めのうちは意気揚々と進めていたが、「タブ」はざっと概算しただけでも 5000 を超える数が存在し、その 1 個 1 個に対して「delete」と「スペース」ボタンを押していく単純作業は決して易しくはなかった。

この気が遠くなるような作業を、ブツサ文句を言いながら進めていると、その姿を見かねたのか、隣に座っていたサラリーマンが声を掛けてきた。「うるさい。」と文句を言われると思った彼らは、謝る準備をしながらサラリーマンの方を向くと、予想もしていなかった言葉を掛けられた。50 歳くらいのそのサラリーマンは、「うるさい。」ではなく、「困ってるみたいだね。そのやり方教えてあげようか?」と言ったのである。あまりに予想外の展開に一瞬戸惑ったが、彼らは 2 つ返事をお願いした。サラリーマンにやり方を教えてもらい、それを試すと、まるで手品のように「タブ」が「半角スペース」に入れ替わってる。

その後、作業はすこぶる快調に進み、この作業を無事に終わった。他の作業を始めてからしばらく経った頃、彼らの中のある 1 人が血眼になってパソコンのボタンを連打し始めた。

「カチ、カチカチ、カチ、カチカチ、カチ、カチカチ」

乾いた音がまるで機械のように正確に聞こえて来る彼の方を見ると、自分のテキストファイルの「タブ」を 1 個ずつ「半角スペース」に変更しているのである。他の全員が効率的な方法を習得したにも関わらずに、彼はその波に乗り遅れたようである。彼が波に乗り遅れることはこれまでも多々あったので、6 人にとっては驚きではなかったが、1 人でリズムを取りながら黙々と「タブ」を 1 個ずつ「半角スペース」に変更していく彼の姿はあまりに滑稽で、全員笑いを堪えずにはいられなかった。それは前日から続く作業の疲れが少し吹き飛ぶ光景であった。

結局、その日彼らは決戦に負けてしまった。絶対に負けられない決戦に負け、決戦の内容は反省すべきことだらけであったが、彼らには下を向いている暇はなかった。次なる決戦に向けて彼らは清々しい朝日を浴びて学校へと歩を運ぶのであった。

その後の道のりが長く、多難であることを知らずに…



10 月某日、日吉での入ゼミ企画に備える著者 (左)、国民の人気キャラクター「キョロちゃん」(中央)、波に乗り遅れてしまった「彼」(右)



波に乗り遅れてしまった「彼」のピン写 (本人の希望で顔がわからないように修正、修正は「彼」のことを愛してやまない後輩が担当)